

COCONUTS CLUB

March 2020 3

歩いて探る、地名の謎 其の四
谷と海のこす小鈴谷編がや



歩いて探る、 地名の謎

谷と海の小鈴谷編

其の四

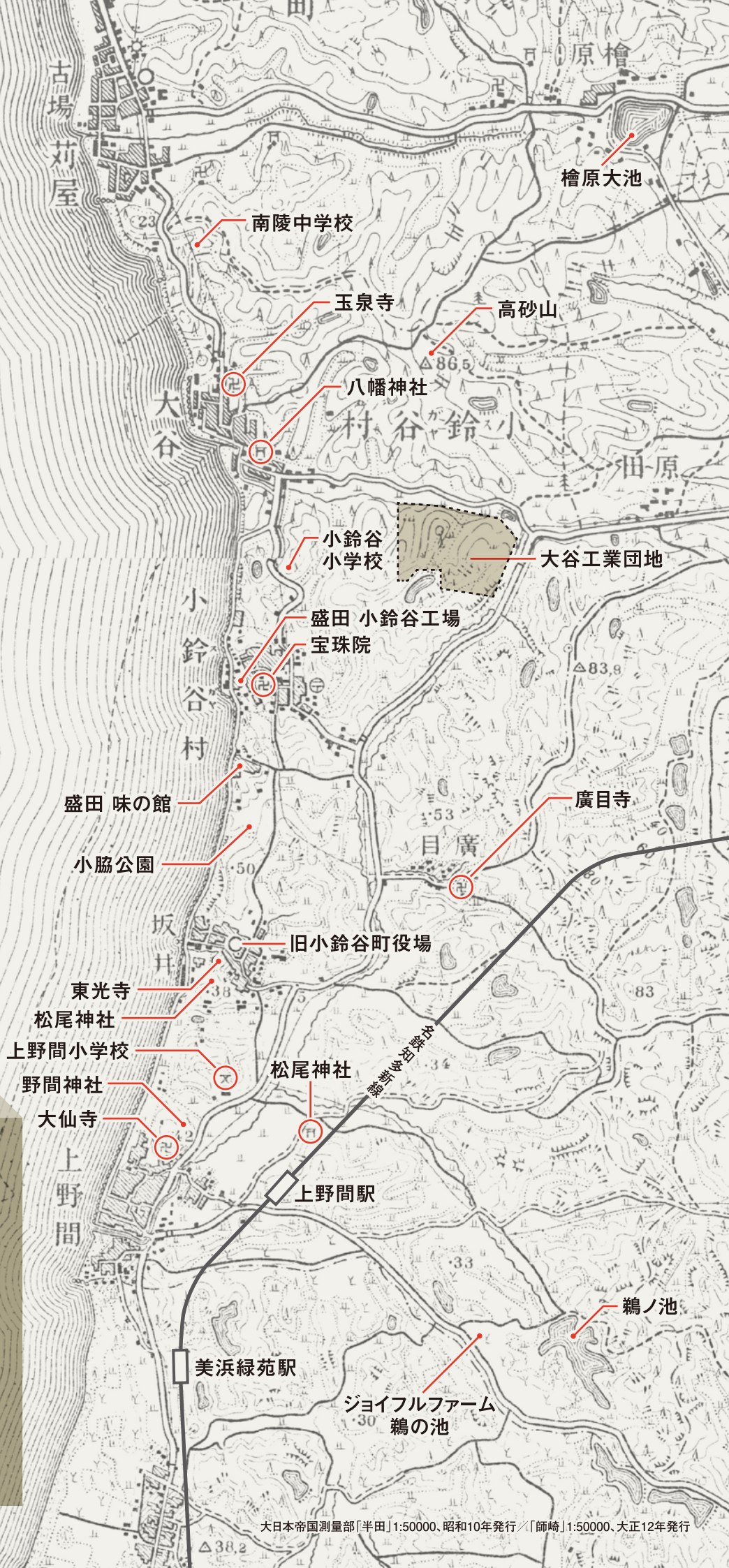
前号の西浦地区編に続き、今回は常滑市小鈴谷地区と美浜町上野間地区を巡ってみる。

両地区は昭和32年まで旧知多郡小鈴谷町として

ひとつの町であり、常滑と美浜の雰囲気が

入り混じったような独特の空気感をまとう。

歴史の話題が豊富なこの土地で、さて何が見つかるか。



今回の主な参考文献

「尾張国地名考」…安永5年(1776)に佐織(現あま市)に生まれた郷土史家・津田正生が幕末に執筆。尾張全域の地名の由来を考察しており、全12冊に及ぶ。大正5年(1916)に一冊にまとめて出版され、全680ページのうち約70ページが知多半島に割かれている。

「知多郡史」…昭和以前の知多半島の歴史・地理・行政・文化を網羅した地誌で、大正12年(1923)に全3巻で刊行された。発行は、明治時代後期から大正時代まで半田に置かれていた知多郡役所。

知多郡小鈴谷町小史

明治39年(1906)、小鈴谷村(小鈴谷+広目)・大谷村・坂井村・上野間村の合併により知多郡小鈴谷町として発足。役場は坂井(現・坂井老人憩いの家)に置かれた。昭和27年(1952)の町制施行を経て、昭和32年(1957)に小鈴谷・広目・大谷・坂井が常滑市に、上野間が美浜町に合併した。

大谷の谷は大きいか小さいか

前号の西浦地区めぐりの最後に訪れた檜原大池から山あいの道を南下して、今号は高砂山から始めるとしよう。地形図や道路地図には山名が記載されていないので、パソコンやスマホをお持ちの方はGoogle Mapsで「高砂山公園」と検索していただきたい。常滑市大谷の東にそびえる標高87メートルの小高い山だ。

前号で、熊野町の地名の由来となった熊野神社に触れたが、その熊野神社がもともとあったのがこの高砂山だったと伝えられている。その昔、伊勢湾に棲む龍神の持ついた翁の面を拝借してこの山で雨乞いをする、それに気づいた龍神が面を取り戻そうと海から立ち昇ったので、竜巻が起きて雨が降り、日照り続きの村が救われたという伝説がある。その山頂にあるのが高砂山公園で、地元有志によつて30年ほど前に整備され、大谷の象徴ともいえる場所になっている。本誌では、2015年7月号『常滑三名山をゆく』で紹介して以来、二度目の訪問となる。

公園の展望台上に登れば、海と丘とが織り成す伸びやかな風景に包まれる。取材は1月中旬だが、記録的な暖冬のせいだろう、霧がかかつてほとんど春のようだ。セントレアは見えるものの、背

している。「小鈴谷の鈴は地中に埋没してあったのを出土したから名を得た」とのことであつて、その以前は小谷であつたとの事である」。つまり、何かの折に鈴が地中から発見されたのを機に、小谷に「鈴」を足して地名にしたというのだ。鈴は神具として古来使われてきたので、その鈴も神聖視されたと思われるが、一体なんの鈴なのだろう。今も残つていればこの説の信憑性もぐっと高くなるが、残念ながら伝説の存在のようである。

この地名には他の説もある。江戸時代中期に尾張藩土の内藤東甫により編纂された尾張国の地誌『張州雜志』には、鷹狩の際に鷹が鈴を鳴らしたので小谷に鈴を加えて小鈴谷にした、とある。また『尾張地名考』には、小鈴谷の鈴はもともと笹竹の一種を意味する「スズ」とあり、コスズガヤと呼ばれていた地名に「鈴」の字を当て、読み方も「コスガヤ」にしたという。この解釈は要するに、大昔は笹が生い茂る小さな谷だった、ということだ。

境、坂道、井戸、知多酒

さらに南下して、常滑市最南端の坂井を目指そう。

常滑市街から海岸沿いを走ってきた西浦街道(国道247号旧道)は、小鈴

後の鈴鹿の山並みは完全に消えてしまつている。眼下に見える大谷は、海岸線に沿つて南北約1.5kmの家並みが連なる細長い集落である。面白いのは、集落の北端、中央、南端にポコポコポコと小山があることだ。切り開いて宅地造成された山の上や、山の裏側に広がる圃場整備地域周辺に建つ家もあるが、もともとは小山の麓の海沿いに家々が肩を寄せ集めていた。

谷という言葉は「山と山の間の窪地」という意味である。一口に谷と言ってもその規模は様々で、黒部峡谷のようなワイルドなV字谷もあれば、大野谷や阿久比谷のような低い山に挟まれたゆつたりした農村もある。丘を挟るようにして無数の小さな川が流れ出ている知多半島などは、言ってみれば谷ばかりの土地だ。こうして眺めると、大谷も谷の村であることが理解しやすい。

ただ、なぜこの地名は谷に「大」を付けたのだろうか。『尾張地名考』にも「谷広からず、小谷ともいふべき地理なり」と指摘されており、もつともだ。しかし、P.03に掲載した昭和初期の古い地形図を目を凝らして見てみると、集落の周囲には小さな窪地がたくさんあることがわかりただけだと思う。そのいくつかは、昭和後期の大規模な圃場整備によつて均され、消滅してしまつたのだろうか。とすれば「大谷」谷が多い

谷の集落に入ったところでぐいと東に折れて急坂を登り、峠を越えて内陸に入るが、西小鈴谷交差点から直進し海と崖に挟まれた道を行けば、ダイレクトに坂井の集落に入る。坂井には、大正時代から知られた海水浴場や、昭和10年(1935)に開業した温泉旅館の湯本館があり、古くは別荘や旅館も建ち並ぶ保養地として賑わつた。野間・内海を中心とした観光エリアの北辺に位置しているといつてもいい。常滑市域でありながら、美浜町や南知多町に通じる雰囲気を持つているように感じられないだろうか。

それもそのはずで、坂井は古くから境界の村だった。前号の『歩いて探る、地名の謎 其の三』で、平安時代末期から鎌倉時代の頃に常滑市南部・武豊町・美浜町東部にまたがる地域に存在した莊園「積豆志莊」について触れたが、その南には別の莊園「野間内海庄」も存在しており、坂井は二つの莊園のちょうど境界あたりに位置している。また『知多郡史』には、莊園より前に存在したとされる「富具郷」と「贄代郷」の境界に発達した土地であると記されている。いずれにしても坂井は、境目にあることが地名の由来との説が有力のようだ。

境界というならば、ずばり「境」「堺」という地名が全国に分布している。な

土地」と解釈してもよさそうな気がするが、どうか。

鈴はどこへ消えた？

続いて向かうのは小鈴谷。ここは大きな話題が二つある地区だ。ひとつは知多半島を代表する旧家、盛田家。江戸時代初期の寛文5年(1665)に酒造を始め、知多の酒造りの先駆となった。もうひとつは鈴溪義塾。盛田家第11代久左衛門(命祿)が教育者の溝口幹とともに創設した私立学校で、多くの優秀な卒業生を輩出した。この学校については2016年6月号『鈴溪ものがたり』で特集している。鈴溪義塾の名は地名が由来で、「二字のうち「谷」を「溪」に置き換えて音読みしたもの。

小鈴谷は三方を山、西を海に囲まれた狭い土地に集落が形成されており、谷らしい雰囲気を持たえている。海沿いのわずかな平地には盛田家と醸造蔵があり、いっぽう民家はその後傾斜地に集まっている。見た目はまさしく「小さな谷」。こと比べれば、大谷は「大きな谷」とみなしてもいいかもしれない。しかし、間に入った「鈴」はいったい何なのだろうか。しかも「こすがや」という読み方も難しく、他地域の人はすんなりとは読めないだろう。

これについて『知多郡史』ではこう記

本村は風俗醇厚にして着実の美風あり。
村治円満、一村団欒として平和の境地を現出しつつある。

(昭和11年小鈴谷村発行「合併三十周年記念號」掲載、冨田良材氏の「所感」より)



高砂山公園展望台から眺める大谷の全景

か 斯かる郷土に生を受くる吾等こそ、
まこと 眞に幸福と謂つべし。

(昭和11年小鈴谷村発行「合併三十周年記念號」掲載、青木忠三氏の「祝辞」より)



上野間公民館から野間神社の森を望む

の神を呼び寄せたのだろうか。とすると、サカイには「酒井」の字も浮かび上がってくる。

野間の上、あるいは「神」野間

上野間は、旧知多郡小鈴谷町の5地区のうち、唯一美浜町との合併を選じた地域である。

昭和30年前後の「昭和の大合併」で、旧小鈴谷町の行く末は最後まで喧々^{けんけん}々々^{けんけん}の議論が巻き起こった。選択肢は「常滑市への合併」「武豊町・富貴村との合併」の二つだったが、議会の意見がまとまらず住民投票を実施。その結果、武豊・富貴案への賛成票がわずかに上まわ

り、その方向で調整が進められた。しかしその話も難航し、昭和29年(1954)には小鈴谷町の決断を待たずに武豊町と富貴村が合併して新・武豊町が誕生。小鈴谷町は取り残されてしまった。

一方で、すでに4町1村の合併でスタートしていた常滑市は、旧小鈴谷町にも加わるよう呼びかけた。町はそれに乗り気になるが、上野間だけは難色を示す。理由は、上野間には新・美浜町内に耕作地を持つ者が多いことや、常滑市になると最南端になってしまうことなど。今度は上野間だけで住民投票が行われ、その結果、上野間だけが既に誕生していた美浜町に遅れて編入されることになったのだ。



上野間の町並み

地名から考えても、上野間はやはり野間との関係性が強いようだ。『尾張国地名考』では、ノマは沼の意味で、上野間は野間内海庄の北端に位置しているゆえの地名だろうとしたうえで、もう一つの説として、上は「神」とも考えられると記している。神とは、上野間の氏神である野間神社のこと。『知多郡史』には「野間連の祖神野間天神の祀られてある地」としている。なるほど、上野間の「カミ」は方角とみなすのが合理的に思えるが、神と解釈すると土地の歴史が立ち昇ってくるようだ。

その野間神社は集落北側の鬱蒼とした小山にあり、扇の要のような位置で集落を見守っている。



廣目寺の毘沙門堂



広目公会堂の鬼瓦

ぜ「坂」と「井」なのだろうか。

坂井の地形は、大谷や小鈴谷と同じく山と山に挟まれた谷あいの土地である。集落を歩くと、南北にもこもこと盛り上がる丘に向かって伸びる何本もの坂道を目にする。中でも、P.03の地図で旧小鈴谷町役場の東側から北へ向かう道筋には、家並みを抜けたところから今の小脇公園あたりまで続く長い坂道があった。圃場整備で往時の面影はないが、この道は坂井と小鈴谷を結ぶ最短ルートで、徒歩移動が当たり前だった昔はよく使われた道と思われる。内陸を通る現在の国道247号も、上野間から坂井を経て小鈴谷へと至る海岸沿いの県道も、坂を避けて開かれ

た新しい道である。「坂」は坂井の象徴のひとつと言ってもいいだろう。

では「井」のほうはというと、集落を歩いてみて、いわくのある井戸をひとつ見つけた。坂井唯一の寺、東光寺の駐車場の片隅にある「東林下ノ清泉」がそれ。この井戸の由緒はこうである。

天正元年(1573)12月3日、東光寺に身を寄せていた僧が、村に水が乏しいことを憂慮し、薬師如来に祈願した。するとその夜、薬師如来が夢に現れ「東林の下に清泉湧き出づる」と告げる。翌日そこを掘ると、お告げのとおり水が湧きだした。以後、村人は長きにわたりその水を利用した。

薬師如来は、東光寺境内の薬師堂に



旧西浦街道から見る小鈴谷

ところである。松尾神社は酒の神様。酒といえば、坂井には江戸時代から明治末年まで二百年ものあいだ酒造業を営んでいた陸井家、「南倉」と呼ばれた大崎家、陸井家から分かれて昭和18年(1943)まで操業していた「西倉」と、三つの醸造家がある酒の町だった。松尾神社は明治11年(1878)に上野間より遷座したもの。酒の町が酒



坂井にある「東林下ノ清泉」



役場跡地の坂井老人憩いの家に立つ小鈴谷村道路元標



坂井の松尾神社

広い眼の毘沙門さん

上野間で伊勢湾にそそぐ稲早川に沿って北へと少し戻り、最後は内陸の集落、広目を訪ねよう。

国道247号広目交差点に、道を挟んで防災格納庫と「開運毘沙門天」と刻まれた標柱が建っており、ここが広目への「表門」となる。交差点の少し先から家が現れ、奥のほうへ500メートルほど家並みが続いている。一番奥まで進むと、小高いところに毘沙門天を祀る廣目寺が現れた。この寺こそ、広目の地名の由来である。

寺伝によると、起源は弘法大師が開いた一乗山廣目寺。この寺は弘法大師の修行地としてその名を知られ、七坊を有する大寺院だったという。集落入口の「表門」というのは比喩ではなく、かつてはそこに廣目寺一山の山門があったと伝わる。しかし慶長5年(1600)、九鬼嘉隆の軍勢が知多半島に侵攻した際に伽藍を焼失し、廣目寺は廃寺となつてしまった。それからおよそ130年のちの元文元年(1736)、当地を訪れた僧が発願し、大谷にあった瑞雲寺を移して寺を再興する。それから長らく瑞雲寺と称してきたが、大正10年(1921)、当時の住職が往古の寺号である廣目寺に戻した。

九鬼氏によつて寺は灰燼に帰した

が、創建以来の毘沙門天は戦火を免れた。江戸時代中期に寺が復興してからそれを祀ると、諸願成就、長命、子供の夜泣きや虫封じに御利益があるとして、参拝者が続々と訪れるようになって、なかでも昭和9年(1934)に武豊の東大高の娘がかかった難病を治した霊験は広く知られたという。

毎年2月中旬に執り行われる毘沙門天の大祭には各地から人が押し寄せ、先々代のお庫裏さんである三浦雪子さんによると、平成の初め頃までは「お寺の周囲に出店がずらりと並び、それは大変な賑わいでしたよ。十年ごとの御開帳も盛大でした」という。近年は出店こそないが、今年も本誌発刊直前の2月16日に大祭があり、ほうぼうから善男善女が訪れたことだろう。毘沙門天を安置する堂内には、つい最近寄進されたばかりという真新しい赤い提灯が吊り下げられ、参拝客の目を引きつける。

その毘沙門天の像は大きく見開いた幅広の目が特徴で、それにちなんで廣目寺という寺号が付けられたという。ちなみに、野間の南部に細目という集落があるが、こちらは知多四国第49番吉祥寺に祀られている毘沙門天の目が細いことが由来とされ、広目と細目の毘沙門天は同じ木から作られた「兄弟」との伝説もあるそうだ。

その足で歩けば歩くほど、
ふるさとの面白さを知ることができるのだ。

上野間の海岸から坂井、小鈴谷、大谷を望む

(取材協力)瑞雲閣廣目寺

(参考文献)尾張国地名考／知多郡史／角川地名辞典23 愛知県／鈴漢義塾と溝口幹一・鈴漢ゆかりの史跡解説一(永田文夫)

坂井の歩みと祭り(常滑市坂井区)／常滑市誌／美浜町誌 本文編／合併三十周年記念誌(知多郡小鈴谷村発行、美浜ふるさと研究会復刊)